

# 特別記事

## 世界のドラフトホース (6) イタリア, オーストリア編 柏村文郎



柏村文郎 (かしわむら ふみろう)

1950年生まれ。1977年に帯広畜産大学畜産学研究科修士課程を修了。1977年から4年間全国酪農業協同組合連合会に勤務。1981年に帯広畜産大学助手採用、現在同大学食料生産科学講座(家畜生産科学分野)教授。学生時代4年間馬術部を経験し、現在は馬術部部长。研究教育は乳牛の管理と馬学。研究室ではアラブ、北海道和種馬など10頭の馬を学生と共に管理している。

### 1. イタリアの馬

障害飛越のときの前傾姿勢(ツーポイント)の騎乗方法は、イタリアの騎兵将校カプリリーの理論を発展させたものである。また、イタリアの名白楽フェデリコ・テシオが生産したネアルコは、紛れもなくサラブレッドの世界的名馬である。このように乗馬や競馬の世界でイタリアは大いなる貢献をしているにもかかわらず、イタリアの馬産について日本では意外と知られていない。ここで、イタリアの馬の歴史について少し紹介する。

先史時代のイタリアの地には、馬やポニーはいなかったようである。ローマ帝国の隆盛とともに周辺諸国からさまざまな馬が導入され、複雑な雑種交配が繰り返されてきた。ローマ帝国時代の馬は、主として繋駕(軽い馬車)用で、乗馬用は少なかった。当時最良の軍馬は騎馬遊牧民であるフン族の馬であったという。ローマ時代から純血種(マテリア・デネロサ)、半血種(マテリア・ムラリエ)および冷血種(マテリア・ブルガリ)として馬を分類していた。ローマ時代の純血種は、スペイン、シチリア、ベルシャから持ち込まれた馬で、主に競馬やサーカスで使われていた。半血種はそれらの馬を地元の馬と交雑した乗馬や馬車馬であり、冷血種は北イタリアの農用馬であった。現在のオーストリアの地域はローマ時代にはノリコムと呼ばれており、その地方の山岳馬もイタリア半島に持ち込まれた。今日イタリアでアヴェリネーゼと呼ばれる馬は、オーストリアのハフリンガーと共通の祖先をもつ品種である。イタリアの歴史の中で有名な品種または

馬種として、フリウリ、マレンマ、サレルニタ、ザルディニア、シシリーなどと称される多く優秀な馬種が存在したが、激動の歴史の中で消えていった。19世紀の中ごろに行われた無秩序な外国種の導入によってイタリア馬の体型がくずれたため、1922年ファシスト独裁政治下で全国8種馬所を中心に馬産統制が行われた。この時に使われたのがアラブの種馬で、顕著な成果を上げたという。しかし、敗戦後これらの良馬も消えていった。イタリアの馬の歴史は戦争や文明の変遷と深く関わっており、まさに国の栄枯盛衰の歴史を物語っている。この辺にイタリアの乗用馬が品種として成立しづらかった原因があるように思われる。写真1はレオナルド・ダ・ビンチの残したデッサンから作成した巨大な馬像である。

現在、イタリアでは純粋種として9品種が血統登録



写真1 ミラノにあるダ・ビンチの馬像

されている (表1)。表1をみると、アメリカ原産のクォーターホースが一番多く生産されているのが意外であ

る。その他、純粋種とはいえないが血統登録されている14馬種を表2に示した。

表1 イタリアの正式な血統馬 (2000年) イタリア畜産協会資料より

用途	品 種		登 録 馬			牧場数
	イタリア語	日本語 (仮)	種雄馬	繁殖雌	計*	
重軌・食用	Agricolo Italiano	イタリア重軌馬	341	3,206	6,684	669
乗用	Avellignese	アヴェリネーゼ	235	5,104	8,501	2,788
乗用	Bardigiano	バルディジャーノ	90	1,520	2,140	666
乗用	Maremmano	マレマノ	163	2,414	3,900	1,227
乗用	Quarter horse	クォーターホース	4,865	7,943	12,808	1,200
乗用・軽軌	Lipizzano	リピッツアー	41	90	475	37
繋駕	Trottatore Italiano	イタリアントロッター	380	6,200	—	—
競走・競技	Sella Italiano	イタリア乗用馬	1,241	9,329	—	—
競走用	Puro Sangue Inglese	サラブレッド	199	2,540	—	—

表2 イタリアの非血統馬 (2000年) イタリア畜産協会資料より

用途	品 種		登 録 馬			牧場数
	イタリア語	日本語 (仮)	種雄馬	繁殖雌	計*	
乗用・軽軌	Murgese	ムルゲーゼ	90	1,754	2,831	210
乗用	Tolfetano	トルフェターノ	76	881	1,278	225
乗用	Sanfratellano	サンフラテラーノ	30	802	1,364	467
乗用・食用	Cavallo del Catria	カトリアの馬	27	432	691	83
乗用	Pony di Esperia	西のポニー	12	352	662	26
乗用	Cavallino della Giara	ジャラの小馬	66	365	739	83
乗用	Cavallo del Ventasso	ヴェンタッソの馬	6	185	353	42
使役・食用	Norico	ノリーコ	16	167	256	74
乗用	Pony di Monterufoli	モンテルフォーリ・ポニー	8	43	83	20
乗用	Asino Ragusano	ラゲーサ・ロバ	24	220	337	58
乗用	Asino Martina Franca	マルティーナフランカ・ロバ	24	93	235	31
乗用	Asino Amiala	アミアアラ・ロバ	28	173	373	61
乗用	Asino Sardo	サルディーニャ・ロバ	52	226	498	118
乗用	Asino Asinara	アジナーラ・ロバ	5	11	21	2

\*: 表1と表2の計には種雄馬・繁殖雌馬の他に30ヵ月齢以下の子馬や育成馬が含まれている。

## 2. イタリア重挽馬 (写真2, 3)

英語では Italian Heavy Draft と呼ばれているが、イタリア語では Agricolo Itariano であるからイタリア農用馬の意味になる。この品種の原産地はイタリア北西部のポー川流域の低地帯である。このポー平原はイタリアで最も広い平野で、農業が広く行われている地域である。当地では、19世紀から20世紀初頭に牽引力の強い農用馬を求めて、ベルギー挽馬（ブラバント）が導入された。しかし、ベルギー挽馬との交雑種は、力は強



写真2 イタリア重挽馬（雌6才、栗毛、体高157、体長181、胸囲233、管囲23.5 cm）



写真3 イタリア重挽馬フェラーラの種馬所にて（雄12才、尾花栗毛、体高160、体長170、胸囲222、管囲25.0 cm）

いが動きが遅いという難点があった。とくに砲兵隊の馬としてももう少し軽快な動きの馬が求められ、この動きを改良するためフランスからペルシュロンおよびブーロンネが導入された。しかし、これらの品種も動きを改良するという点で彼らを満足させるものではなく、最終的に行きついたのがブルトンであった。フランス北西部のブルターニュ地方に飼養されているポステイエ・ブルトンは、イギリスのノーフォーク・ロードスターの血液が入っているため軽快な速歩ができる。このブルトンの導入が成功をおさめ、動きの軽快なイタリア重挽馬の基礎ができあがった。動きが軽快であったため「スピードのある農用馬」として都市部の輸送手段としても広く受け入れられた。しかしその後、馬車需要が激減し、馬産の目的は食肉用に移っていった。

イタリア重挽馬は体積のある馬で、成馬になると700～900 kgになる。体高は156～160 cmの大型馬が好まれている。毛色は、濃い赤みがかった栗毛が多く、たてがみと尾は明るい毛色が特徴である。早熟性に優れ、7～8ヵ月齢で400 kgになる。飼育方法は、イタリア中部のフィレンツェあたりでは周年放牧されている。イタリア北部では、夏は放牧が主体であるが、冬期3ヶ月は舎飼がみられる。現在のイタリア重挽馬の用途は、90%が馬肉生産で、その他10%が農業用や各種イベントなどの趣味で飼われている（写真4）。肉馬としての改良のため、ブルトンの中でも早熟で肉量のあるトレ・ブルトンがフランスから定期的に導入されている。農業用の利用としては、イタリア北部の山岳地方で材木の切り出しに使われているらしい。イタリア重挽馬の最近の年間登録頭数の推移を表3に示した。2000年の飼養戸数は約900戸で、3,200頭の雌馬が繁殖に使われている。種雄馬は430頭であった。繁殖方法は、自然交配が85%（まき馬と人が介助する方法が半々）と人工授精が15%である。日本ではサラブレッドが中心であるため馬の人工授精は馴染みが薄い

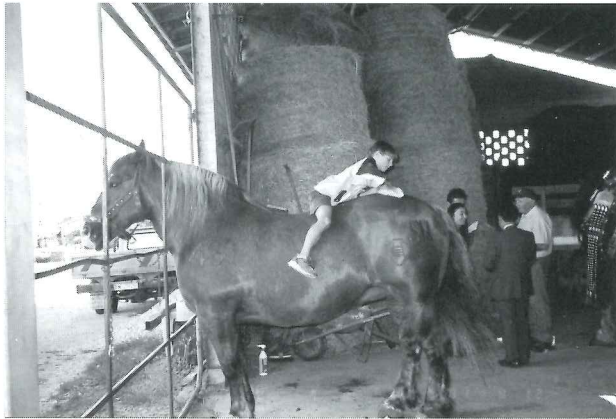


写真4 趣味で飼われているおとなしいイタリア重挽馬（雌11才、体高163、体長172、胸囲240、管囲24.0cm）

表3 イタリア重挽馬の登録頭数  
イタリア重挽馬協会資料より

	1990	1995	2000
繁殖雌馬	1,927	2,326	3,206
育成馬（30ヵ月）	235	349	526
育成馬（18ヵ月）	338	495	639
育成馬（6ヵ月）	998	1,488	1,829
種雄馬	325	305	429
計	3,823	4,963	6,629

農用馬では必ずしも珍しいことではない。ただし、牛とは違い凍結精液の利用は少ない。

イタリアでは馬肉が食されるといわれるが、馬肉を食べるのは特定な地域である。北部ではフリウリ、ヴェネチア、ジュリア州、また中・南部では、ローマやプーリア、カンパーニア州で消費されているという。馬肉が消費される地域を図1に示した。馬肉が食されるのが地域限定であることから考えて、これらの地域では歴史上大飢饉が起これば馬を食べざるを得なかったのではないかと私は想像している。イタリアでは一人当たり年1.1kgの馬肉が食されており（表4）、南米からは枝肉で、ハンガリーからは生体で輸入している。



図1 イタリアの馬肉消費地域

表4 各国の馬肉消費量

	フランス	オランダ	ベルギー	イタリア
(kg/年・人)	1.5	1.9	3.6	1.1

### 3. 肉用馬としての育種改良

アングロ・サクソンの国で馬肉を食べる話はタブーである。馬を肉用種として積極的に育種改良をしている国は世界でも珍しい。私はイタリアでその実態を知った。改良の方法は以下のものであった。馬が生まれるとまず血統登録が行われ、6ヵ月齢になると審査が行われる。12名の審査員が手分けして農家を回り、約1,000頭の馬を審査する。ただし、この審査員の資格を得るのはそう簡単ではない。最低2年の見習い期間を経て、4～5年後にペーパー試験と実地試験を受けるといふ。私が訪問した当時は12名の審査有資格者と6名の見習い中の助手がいた。審査の結果、6ヵ月齢で雄馬は10%のみ、雌馬は90%が種馬候補となる。そこで淘汰された馬は肉用として処理される。さらに30ヵ月齢で種雄馬は5%、雌馬は80%が最終的に種馬として繁殖登録がなされる。

審査方法は、日本の乳牛の体型審査で実施されてい

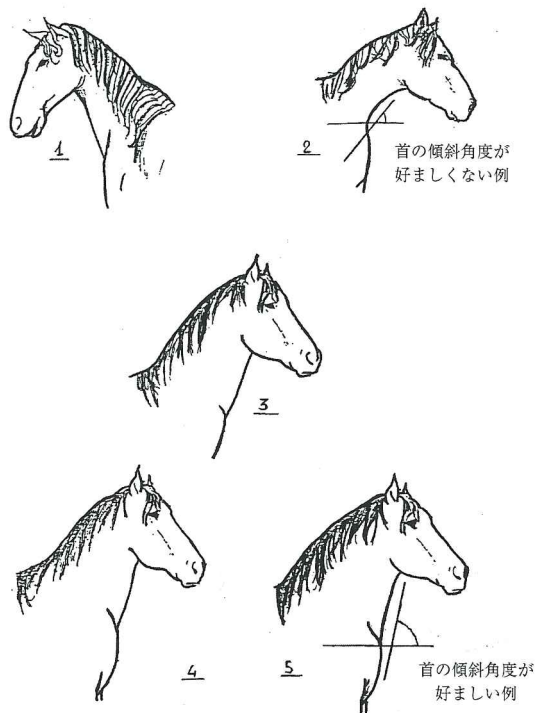


図2 頭部と頸部の評価基準

- クラス5：頭部は比較的小ぶりで、角ばって、細面で、頭基礎がしっかりしている。額は広く平坦で、眼窩がくっきりしている。眼は大きく、生き生きしている。鼻梁は直線的で鼻管は広めである。鼻孔は大きく、よく動く。顎の間の溝は広くゆとりがある。耳は小さく、よく動き、真直ぐに立っている。頸部は均整のとれた長さで、筋肉が盛り上がり、しっかりと安定している。
- クラス4：クラス5に比べ若干劣る程度。
- クラス3：クラス5に比べ明らかにいくつかの欠点が目立つが、頭部は大きくはない。
- クラス2：他の特徴に関わらず、頭部が大きい馬。
- クラス1：他の特徴に関わらず、頭部が非常に大きい馬。

る線形審査である。例として、頭部と頸部のスコアを図2に示した。この場合はスコア5が最も好ましいとされるが、部位によっては中間のスコアが最も好ましいこともある。このようにして、馬の頭や頸、動き、発育度（下肢）、体高、臀部、背部、肩部、胸深、胸幅、尻幅、背長、背ライン、後肢勢、飛節、繋ぎの向きなど14項目について1から5までのスコアが付けら

れる。このスコアをもとに遺伝評価値（育種価）がBULP アニマルモデルによって計算される。アニマルモデルとは後代検定の統計分析手法で、スコアを付けた馬をもとに血縁や血統をさかのぼり、その両親の遺伝的能力を求める方法である。得られた結果は、1年ごとにすべての種雄馬と繁殖雌馬について遺伝能力指数として公表される。この遺伝能力評価システムは、大学と生産者団体が連携して、1995年から始められ、現在も改良が加えられている。この事業には政府機関は直接的には関与していないが、スタッドブックの登録費用や印刷費などの経費の80～90%が補助金で賄われているという。

#### 4. オーストリアの馬

オーストリアの歴史を概観すると、旧石器時代から人類が住みつき、ケルト文化、ハルシュタット文化、ローマ帝国の属州、フン族の支配、ゲルマン民族の移住、フランク王国による支配、マジャール人（ハンガリー人）の侵入、神聖ローマ帝国によるバーベンベルグ家の統治を経て、14世紀以降のハプスブルグ家の支配へと続く。このような歴史をみると、オーストリアはアジアの騎馬遊牧民族とヨーロッパの大国とがぶつかり合う地理的宿命にあったといえるであろう。そのため戦争に使う乗用馬生産が重要であったことも必然である。オーストリアの首都ウィーンには1729年に創設されたスペイン乗馬学校がある。古典馬術を継承するスペイン乗馬学校で使われている馬は、全世界で3,000頭しかいないという芦毛のリピッツァ種である。リピッツァは、オーストリア南部のピーバー牧場で生産され、スペイン乗馬学校で15才まで供用された後、種雄馬にされているという（写真5）。リピッツァには、6つの系統があり近親交配を避けるように管理されている。

1806年の神聖ローマ帝国の崩壊、オーストリア帝国の宣言、オーストリア・ハンガリー二重帝国の形成、

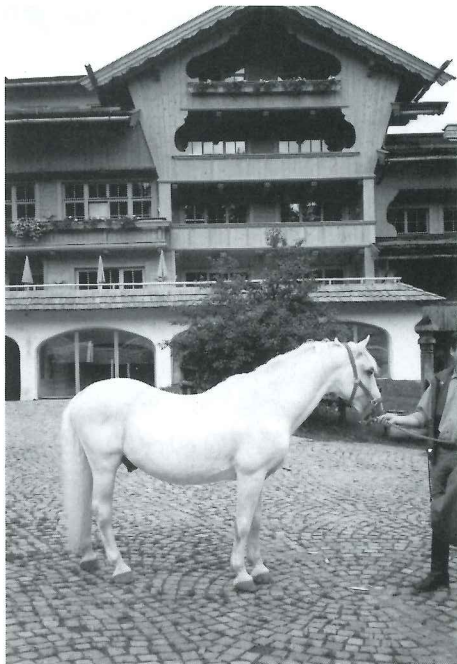


写真5 ウィーンのスเปน乗馬学校を引退したリピッツァ。15才を越えると種馬として使われている。この馬は1千万円で購入したと言う。

第1次世界大戦の勃発と敗戦、ハプスブルグ家の崩壊、ナチスの台頭と第2次世界大戦の勃発そして敗戦。この国の激動の歴史をみると、自分たちのアイデンティティ（独立心）を大切にする国民性がうなずける。オーストリアは9つの州からなり、それぞれ独立性が強いことはドイツに似ている。それぞれの州の馬の頭数を表5に示した。

### 5. ノリカー（写真6, 7）

オーストリアのドラフトホースはノリカー（Noriker）と呼ばれ、ヨーロッパで最も古い冷血種として知られている。体高は163～173 cmで、力強い中型の使役馬である。頑健な体躯を持ち、管理しやすい性質を有するのが特徴とされる。ノリカーという名称は、前にも記したがオーストリアの地域はローマ帝国時代にノリコム（Noricum）と呼ばれていたことに由来する。16世紀にローマ人によりナポリ馬とスペインのアンダルシアが持ち込まれ、在来馬ノリコムに交配された。さらに19世紀にはさまざまな品種と交配された。ノリカ

表5 オーストリアの馬飼養頭数（1995年）

州	合計	品 種				
		冷血種	ハフリンガー	熱血種	純血種	小格馬
ブルゲンランド	3,162	92	395	2,003	319	353
ケルンテン	6,959	1,557	2,029	2,054	292	1,027
ニーダーエステライヒ	18,075	795	4,093	8,207	2,103	2,877
オーバーエステライヒ	14,849	1,278	3,003	6,017	1,820	2,731
ザルツブルグ	6,409	1,931	1,427	1,791	346	914
シュタイヤーマルク	12,230	835	4,533	4,230	616	1,816
チロル	6,972	614	3,721	1,434	326	877
フォアアールベルグ	2,788	388	785	1,036	102	477
ウィーン	1,247	5	57	563	533	89
1995年合計	72,491	7,495	20,043	27,335	6,457	11,161
1985年合計	44,858	6,996	13,780	13,131	4,403	6,548

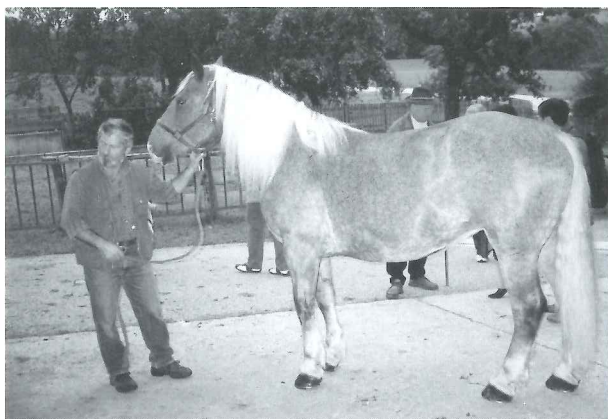


写真6 ノリカー（雌7才、毛色はフォックス、体高158、体長170、胸囲204、管囲22.5 cm）



写真7 ノリカーの種牡馬（雄6才、青毛、体高164、体長173、胸囲207、管囲24.5 cm）

ーはピンツガウアー・ノリカー（Pinzgauer-Noriker）と呼ばれることもある。ピンツガウアーとはザルツブルグ州にある地名である。このピンツガウアー地方の馬には斑点のある毛色（レオパード）が多く、これはスペインから持ち込まれた馬との交配によって出来たものである（写真8）。ノリカーのスタッド・ブックは1903年から始まった。現在のノリカーには4つの地域別の系統がある。この4つの系統とは、Carinthian（Karnter）、Steier、Tyrolean（Tiroler）、Bavarian（South



写真8 ザルツブルグでのノリカーの馬車パレード。500頭参加。写真の馬はピンツガウアーで毛色はレオパードとよばれる。

German Coldblood）である。さらに、先に述べたピンツガウアーもノリカーのスタッドブックに加えられている。

ノリカーのスタッドブックは州ごとに管理されているが、登録には厳格な体型審査と能力検定成績に基づいて行われている。近親交配を避けるために種雄馬は州をまたいで交換されることも多い。現在のノリカーの頭数は、種雄馬と繁殖雌馬は5,000頭、子馬を含めると約8,000頭になる。頭数の多い州は、1番ザルツブルグ、2番ケルンテン、3番上オーストリア、4番シュタイヤーマルク、5番チロルの順である（表5の冷血種）。現在の用途は、観光やスポーツ、森林の切り出しにも用いられているが、肉用が主である。オーストリアでは馬肉を食べる習慣がないので、6ヵ月齢でセリに出された肉用馬は、イタリアのバイヤーに買い取られるという。飼育方法は、夏は山の斜面を利用した放牧地に放され、冬は大きな畜舎で飼育される。最近では、スポーツに使えるようにモダンなスポーティタイプへ改良されつつあるという（写真9）。



写真9 ノリカーと9歳の女の子（雌、青毛、体高158、体長176、胸囲220、管囲23 cm）



写真10 チロル州 Ebbs のハフリンガー種馬牧場にて。ここで生産されているハフリンガーはアラブとの交配で作られた温血種で多少大きめであった。

## 6. ハフリンガー（写真10）

ハフリンガーの体高は133～150 cmとかなり幅が広い。多くはポニーに分類されるが、馬の特徴としてはドラフトポニーといっても良いだろう。一般的にみると平地や海岸地方で使われるドラフトホースは大型で、高原や山地で使われるドラフトホースは小型である。アルプスの山々に囲まれたオーストリアでは、大型のノリカーよりも小型のハフリンガーの方が実用的に使いやすい場面が多かったと考えられる。ハフリンガーの短い肢は安定感があり、器用な足さばきや少ない餌と粗食に耐える特質は山岳地方では有利であったのだろう。さらに戦争の時は、軍馬として輸送や乗馬にも活躍した。ハフリンガーはその実用性のために世界的に広まったポニーでもある。世界50カ国に輸出され、25万頭は飼育されているだろうと言われていれる。さらに世界22カ国に35の登録協会があり、アメリカには1万5千頭のハフリンガーがいるという。また、15年ほど前にはインドに500頭が輸出され、ヒマラヤの海拔5,000 mまで物資を運ぶのに使われたという。根幹馬にはアラブ（El Bedavi XXII）が使われており、

表6 最近のハフリンガーの平均的な体格

単位：cm

	雌	雄	備考
体高	140～150	145～153	雄馬は大型化傾向
胸囲	150～180	150～180	
管囲	18	19	

外貌のほか悍威（反応の良さ）など今でもその特徴が失われていない。毛色はすべて明るい栗毛（フォックスと呼ばれる）、たてがみは薄い亜麻色で、米国のパロミノの毛色とも似ている。最近では乗馬タイプへの改良が進められており、体格も大きくなってきた（表6）。ハフリンガーの名の由来は、南チロルのハフリング「Hafling」村から来ており、スタッド・ブック（血統書）は1921年から開始されている。チロル州 Hebbs のハフリンガー種馬牧場では7系統を維持しており、雄が生まれると父方の系統に入れ、雌だと母方の系統に入れるという。馬の頸にマイクロチップを入れ、近親交配を避けるようコンピュータで配合管理をしている。